



新編

大言海

大槻文彦 著

富山房

新 編

# 大言海



文学博士  
大槻文彦 著

富山房

富山房創立九十五周年記念版

昭和三十一年三月一日 新訂版初版発行  
昭和五十七年二月二十八日 新編版初版発行 ©  
昭和五十七年五月十日 新編版第三刷発行

新編大言海

定価 一万八千円

著者

故 大槻文彦

右相続者

大槻清彦

発行者

東京都千代田区神田神保町一ノ三  
合資会社 富山房

右代表者

坂本起一

印刷者

東京都新宿区市谷加賀町一ノ十二  
大日本印刷株式会社

右代表者

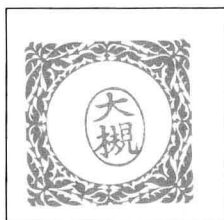
北島義俊

製本者

東京都北区神谷二ノ三十九ノ三  
大日本製本株式会社

右代表者

岩田文夫



発行所

東京都千代田区神田神保町一ノ三  
合資会社 富山房

電話東京二九一—二二七二(代)

振替番  
東京五・五四五二九  
郵便番号一〇一





## 新編大言海 発刊 序

大槻文彦先生の『大言海』は、発刊以来五十年になった。永い間、この国語辞書を愛読利用せられた限りない多くの方々に、厚く御礼申し上げる次第である。

戦後、うち拉がれた騒擾の中から立ちあがろうと犇めく時に、「日本国憲法」に相ついで、「当用漢字・現代仮名遣」が制定せられ、更に「教育漢字・人名用漢字」などが実施された。当時の教育界、出版界は混乱に混乱を重ねながらも、やがて新聞・雑誌・著作物に定着し、制度も手直しが加わり、漸く今「常用漢字・人名用漢字」の時代に移って来たが、なお多くの問題が今後に残されていることは、識者の説くところである。

この著しい国語政策の転換は、国語辞書・漢和字典に波及し、大方、順次新方式を採り入れたにも拘らず、『大言海』は依然当初の姿を保持し続けたが、年と共に読者利用者から「引きにくい」のほか、改訂の要望が高まって来た。読者の声と著作者人格権の尊重と両面の接点を調整する方途は、極めて慎重を要することがらで、検討に検討を重ねて、漸く別記の編集要綱に到達し、これを文彦先生の令孫清彦氏にはかり、御同意を得たので、『新編大言海』に着手する運びとなった。

新編の意図は、現代仮名遣に習熟した現代青少年並びに社会人が、国語を通して古典史

籍に直接親しむ学識を体得するみち、即ち新古に交通する橋渡しの役を勤めるにある。世は移り、制度文物が著しく変化した現代から見れば、ことばの解説にも用語にも、大言海の世界にはとまどうことが少なくないはずである。けれども、これまた古書を繙く者の常に接する避け難いところで、それに耐えてゆくことが、国語を愛する学識への道ではなからうか。まず引き易くして、大槻先生の個性豊かな読む辞書『大言海』を味読して、国語の年輪を理会していただき度いと願うのである。

ここに『新編大言海』を世におくるに当たり、大方の識者、教職の諸先生、研究の学生諸氏の御愛読を、切に冀う次第である。

昭和五十七年一月

富山房

新編 大言海 要綱

- 一、見出し語を現代仮名遣に改め、古典仮名遣―旧見出し語―を右側に片仮名で残した。
  - 二、見出し語及び解釈文中の変体仮名は普通仮名に改め、出典引用文中の変体仮名は偶数ページ下段欄外に例示した。
  - 三、見出し語排列で従来「む」の次に排列されていた「ん」は第二音節以下各音節の末尾に配置した。
  - 四、用言（動詞・形容詞等）の活用（片仮名）順のほかに普通文法の活用（平仮名）順を併記した。
  - 五、発音に二様ある場合は、一方を参照項目で示した。
- 〈付〉 その他、若干の補注を加えた外は、すべて初版のまま。

閲読のしおり

見出し語

太字は和語

細字は漢語

片仮名は外来語

品詞

(形、一)

形容詞ク活用

(形、二)

形容詞シク活用

(辞)

助詞

以上

因みに、前記序文の著作者人格権並びに新編編集要綱について、編者として、その経緯を記して置きたいと思う。

第一には、新編の主眼となる見出し語の歴史的仮名遣を現代仮名遣に改める点である。その淵源は『言海』の索引指南第十二項にある。即ち見出し語について、

活字ノ用キ方ハ左ノ如シ。(スベテ、引出ス言葉ニ就イテイフ)

さいはひ(幸)　けふ(今日)　ゐあひ(居合)　しやうじ(障子)　えうせう(幼少)

ナドト振仮名アルハ、口ニテ呼ブ声ノ標ナリ。(ハイフンを除き変体仮名を改めた)

この方式は『大言海』にも踏襲せられ、凡例(廿六)及び(廿七)に解説せられている。和漢外来語に亘り、仮名遣と発音の相違する語の処理は、現代普通辞書に於ても編集者の配慮するところであるが、現代仮名遣以前にあっては、言海以来の表記法が最も妥当で、当時にあつてはこれを発音式仮名遣と称し、若干の相違はあるものの、これが現代仮名遣に横すべりしたと見ることがができる。

歴史的仮名遣の正しい用法を駆使することの困難は、現代仮名遣が施行せられるまでつづき、「蝶蝶」の「てふてふ」、「教育」の「けういく」の如く第一音節から異なれば、従つて排列も甚しく所を異にするなど、引いては語の存否にも波及する。『言海』以来の大槻先生の配慮が如何なるものであつたかを思わないわけにはいかない。初版『大言海』四巻に続いて富山房が編集した別巻の「索引」は「仮名・漢字・外来語」三篇から成るが、大言海約十萬語中、歴史的仮名遣と発音の異なる語は、約三万四千七百余語(三四・七%)、そのため発音仮名索引を必要とした。大槻先生の令息茂雄先生は「大言海索引の完成に際して」に、

父翁存命中、言海増訂に際し、発音式仮名遣法を以て排列せしめんと意ありし

やうなれども、其期に至らずして終りぬ。今や文彦逝いて十年、此の大言海索引

の完成を草葉の蔭にて、如何に感涙に咽び居るらん。(昭和十二年)



と記されている。即ち著作者人格権の許容し得る限界は、見出し語の表記を現代仮名遣に改めて歴史的仮名遣を傍に保存し、排列を変えるところまでである。これが新編の根柢と限度で、並び及び用言の活用など亦これに準ずる。

『新編大言海』には、大野 晋先生、山田忠雄先生、大岡 信先生、高田 宏先生の大言海並びに新編に対して懇篤な賛辞を頂戴したことは、大言海の元編纂員・索引担当者であり、かつ新編主任の責めを負う迂生の光栄と感謝に耐えないところである。

大野 晋——大言海はその後の国語辞書の親本として最も多く利用されるほどに学界的信頼をうけて来た。私も多くの恩恵を受けている。今、見出しと配列とを現代仮名遣の方式に改め、引きやすいように新しい装いをこらして世に送られるという。この実力ある辞書が、こうして広く活用されることは喜ばしいことである。

山田忠雄——『大言海』を特徴づけるのは、比較的少数の項目の解説に、ややながめの解説を施すところから来るおおらかさと、ほのぼのとした暖かさである。世間一般の読書子は、その点に着眼して『大言海』を今日、日本で唯一の読むに堪える辞書として称揚する。私もこの立場に賛成である。

大岡 信——『大言海』が日本語辞書の一大古典であり、一大傑作と呼んでしかるべきものであることはいままでもない。それだけに、絶えず新しい時代に利用活用されてゆくべき性質のものである。このたび慎重なる検討を重ねた末に新編『大言海』が発行されることになったことは、現代仮名遣で育った人人にとっての朗報である。(中略)『大言海』を後世が長く活用しうるものにするため『新編』を出すことは、博士のむしろ喜び迎えるところだったろうと信じる。

高田 宏——『言海』刊行から九十年、『大言海』が出て半世紀、当然のことながら古びてきた。だが、それでも、言葉にするどい人びとに愛用者が多い。なぜか。

言葉の内なる歴史をとらえているからでもある。しかしそれ以上に、この辞書が一人の人間の国語との格闘の産物だからであろう（「おくがき」を見られよ）。言葉が一つの宇宙であるならば、それに拮抗できるのはやはり一人の人間という、もう一つの宇宙でしかない。

（抄出）

諸先生の賛辞のかげに、既に大槻先生の素志を汲む新編のあり方への深い御配慮と認識が存すると理會するのは、ひとり編者のみであろうか。大槻先生は、八十一歳で筆を持ったまま倒れるまで、「手紙を書き候暇も惜しく候」と改稿に心血を注がれた。新編に全力をあげた編集員ども、感銘措く能わざるところである。

富山房編集部長 青池 竹次 識

## 序 文

大槻博士の言海刊行せられしより茲に四十有餘年、その惠澤に浴せるもの蓋し限りなかるべし。ひとり國語の研究と國文の解釋とに従事する者のみならず、諸科の學徒、一般の讀書子、國語の語詞につきて、その意義その用字その起源その沿革その用例を知らんと欲する者、廣汎にして而も簡素、正確にして以て信憑すべき辭書を求めて、誰か言海を擧げ言海を用ゐざりし者あらんや。言海以來現はれし所の大小幾多の辭書、もとより進歩の蹟さばかり顯著なるものありとは云へ、いかなる辭書か、敢て言海に負ふところ少しとせんや。即ち言海世に現はれてより言辭の學大に進むと稱すべし。

本邦にありてかかる劃期的大辭典たる言海の刊行が完了したりし明治二十四年のころは、十九世紀の末期に方り、恰も歐米諸國に於ても大辭書の陸續世に現はれ、世界の辭書史中にも光彩盛なりし年代に屬せり。即ち大辭書の出現は東西正にその機運を同じうせしものと云ふべきなり。案ずるに、ウエブスターの名辭書に後ること六十年、グリムの獨逸辭書の初刊を隔つること四十年、リットレーの佛語辭書の刊了を去ること二十年、大槻博士の言海は世に出でしものなるが、顧みれ

ば、著名なるマレーが新英辭典の創刊は、言海初刊第一冊の前年に現はれ、米國に於てはウヰブスターの改訂第三版の大冊、スタンダード辭典の巨冊、センチリー辭書の十二大冊、いづれも皆この言海刊行年間の前後に出でたり。語源辭書にありては、英のスキートの著、獨のクルーゲの作、共に言海を遡ること十年内外なり。かくの如き幾多の辭書、刊行の年數、編纂の歲月、協力の多少、自力の程度、規模の廣狹、成果の優劣、元より種々異同あるを免れずと云へども、言海初刊の際における本邦辭書界の幼稚なりし有様を思へば、かくの如き歐米幾多の名辭書がそれぞれ自他の國國に於て擧げたりし功績に比例して、言海が我が國語界と讀書界とに與へし偉大なる影響は決して遜色あるものにあらざるを知るなり。

今や故博士が二十年間の偉業たる大言海世に出でんとす。その間、編纂の辛勞に關しては博士手記の苦心談の本書に添ふあり、以てその一斑を窺ふに足るべく、或は既に、識者の洩れ聞きて知悉する所少しとせざれども、予輩をして獨のグリム、佛のリットレー、共にその精力の老博士に及ばざりしものあるを想はしめずんばあらざるなり。マレー等の新英辭典が立案後三十年にしてその初冊を刊し、爾後四十年にして昭和三年西紀一九二八年を以て漸く十卷十二大冊を刊了し、その精到に於て古今に絶し東西に冠たるの概あるは、固より協心戮力の程度同一の談にあ

らざれば、或は以て論外となすべからんも、大言海の四大冊が實質に於て編者が殆ど獨自の努力に成りし業績なるを思へば、予輩はその精根その氣魄に對して敬仰の念更に大ならざるを得ざるなり。

大言海が語源の考究に力を盡ししことは、亦著者の苦心談中に詳にせり、別に予の贅言を要せざる所とす。語源考につきて著者獨創の確説の以て後世の典據とすべきもの頗る多きは亦説くを須るず。これらの卓越せる點につきて、言海が過去四十有餘年の間、我が國語界、讀書界に光明を放ちたりしが如く、大言海が向後永く學術界の指針を供すべきこと固より疑を容れざるなり。

更に回顧すれば、言海出版完了の翌年なる明治二十五年、予は中學の課程を卒へて高等の學校に進みしが、そのころ此の辭書を父より買ひ與へられし予の喜びは譬ふるに物なかりしを覺ゆ。後年同じ著者の廣日本文典の發刊直後これを購ひて熟讀せしは、予が大學に入りて言語の學に志して一年生のをりなりしが、言海を繙きし際の嬉しさはそれにも勝りたりき。さて、これよりは五年の後、かれよりは十年の後、明治三十五年以降數年の間、初度の國語調査委員會に在りて、予がかの言海、この廣日本文典の著者として多年景仰したりし老博士に親炙するに至りしは、三十歳未滿の一青年として感激の情なき能はざりしなり。今にして三十年前の



昔を憶へば、當年の博士が風貌眼前に髣髴たるものあり。更に遡りてはその舊著たる外來語原考を讀み、新に和蘭字典文典の譯述起原に關する講演を聽き、予が青年期に於て少からざる裨益を得しことは言ふに及ばず、程經て國語の語源に關する博士後年の論說を參考するに至れる頃には、予も亦いつしか語源語史の考證に親しみ、普く東西の辭書の上に興味を感ずること深きに及びぬ。従ひて、昭和三年の春、博士の他界せられしや、予が亦多年親炙して蘭學史料の見聞に請益する所少からざりし令兄如電翁の囑に由りて、故關根正直博士に附驥して、大言海印刷の舉に參與して敢て微力を加ふるに至りしも、因縁決して淺近なりとせざるなり。且つ予今年渡歐の際、我邦將來の國語大辭典編纂の大舉に備へんと欲し、先づ新英辭典の來歴を稽查したりしに、歸朝の後幾ばくもあらずして大言海初冊刊行の盛運に遭ひたるは亦偶然なりとせず。夫れかくの如く奇しき因縁の重なるを感ず、是れ予輩の敢て僭越を顧みず、畏敬せる先覺者の大著に對して蕪文を序する所以なり。即ち一は以て國語界と讀書界との爲に此の大辭典の刊行を慶讚し、一は以て予輩後進學徒の奮勵を期せんとするなり。

大言海が著者獨自の力に成れるところ、獨創の考究に由れるところ最も多きこと前述の如しと云へども、令嗣茂雄君の後語にも見ゆべきが如く、尙ほ編輯を補助

せし少數の人々なかりしにあらざるなり。就中、予輩の特筆せざるべからざるは、大久保初男翁が、四十年前の昔、舊刊の言海の編輯及び校正に参加せられし閱歴と七十に垂んとする老齡とを以て、更に今刊の大言海の編纂補助竝に印刷校正に終始殆ど一貫して盡瘁し、尙ほ引續きて不斷の努力を加へられつつあることにして、予輩この涙ぐましき辛勞に對して、多大なる敬意を表せざるを得ず。

昭和七年十月二十三日

京 都 新 村 出

# 大言海刊行緒言

亡弟文彦増訂せる言海を刊行するに臨み、何か一言せんと考思中感得したる一事あり、嘉永二年先人磐溪に修復二兒歌と題せる詩あり、修はおのれ如電にて時年五歳なり、復は文彦三歳なり、其句に、大兒如白石、着着不後人、小兒如黒石、歩歩只願身と、げにや子を知るは親に若くは無しと古語あり、能くも幼稚の二兒を見透されたり、白石は姑く棚に上げ、黒石の方を見るに、成人の後に學問着實にして、言海官撰の時も只一人して屹屹十餘年、今回の増訂も明治四十五年に稿を起して亦十餘年、其間瀕死の疾のために一年有餘筆を止む、此増訂は意を語原に置き、廣く雅俗内外の群書に涉り、新舊を引證して折中立説、其説皆歩歩願身より出づるなり。

言海増訂中、從來十有餘年、其成稿は阿、加、佐の三行に至る、以下多行より和行に至る筆記抄録數十帖、猶未だ淨書成らず、凡そ國語の概數は阿、加、佐の三行にて全體三分の二を占むる者なり、されば功一簣に虧くの恨みありといふべし、其印行の完成を待たずして此世を去りしは遺憾此上も無し。

大久保初男といふ男は姻族なり、文部編纂の時の寫字生なり、其後大學古典科國文を卒業し、數縣中學に教鞭を執る、其東京に歸り來るや、時恰言海増訂の初めに當れ

ば、直に文彦の座右に増語の助手として居る亦十有餘年、毎時其持論も聞き其手心も知りつらん、されば筆記抄録を整理せんも、さのみ苦にはあらじと思はる。おのれ如電は八十餘歳、着着後人の老脚いかでか掃業の勞に堪へん、仍て校監の事は一切關根新村の兩博士に囑したり、共に其父君より交誼ある所謂通家の好み、此方より懇請し、彼方も亦快諾せられたり、故に其全稿を校刊するも亦遠きにあらざるべし、聊記して言海再刊の緒言に充つ。

昭和五年二月

公・為大槻如電識